『紅樓夢』における海棠と史湘雲

――海棠の花籤と史湘雲の「醉眠」との描寫を中心にして――

澁井君也

はじめに

海棠は『紅樓夢』における登場人物の個性や運命を象徴する重要な花の一つである。森中美樹は『『紅樓夢』に描かれた花は約二百種類にものぼるが、その大多數は局所的あるいは散發的にしか現れず」「海棠のようにある程度の回數を持ち、全體を通して登場する花は、ほかには桃花、桂花、梅花くらいしかない」と指摘している。(1)

史湘雲は『紅樓夢』金陵十二釵の一人であり、「英豪闊大寛宏量」「霽月光風耀玉堂」(2)（第五回）という判詞で示されるように、自由闊達で朗らかな美少女として描かれている。史湘雲と海棠の描寫については、例えば、第六十三回において史湘雲が海棠の花籤を引く描寫が擧げられる。史湘雲の海棠の花籤の裏に書かれた「只恐夜深花睡去」は蘇軾の「海棠」詩より出るものである。また、海棠の花籤に密接に關連する第六十二回における史湘雲の「醉眠」の場面があり、その場面描寫は「海棠睡未足」という楊貴妃の醉態を描いた逸話を踏まえている。(3) 先行研究では、史湘雲の海棠の花籤や「醉眠」の描寫と、蘇軾の「海棠」詩や楊貴妃の「海棠睡未足」との關連性については指摘されているものの、それが史湘雲の人物形象の描寫においてどのように機能しているか、ということまで明らかにされていない。

本稿ではまず、『紅樓夢』全體を通して海棠と史湘雲との關係についてまとめる。次に、海棠の花籤と史湘雲の「醉眠」の描寫を中心にし、その描寫と蘇軾の「海棠」詩や楊貴妃の「海棠睡未足」との關連性、また海棠がその中でどのように扱

四)。また曹雪芹の祖父曹寅『續琵琶』第三十一齣には「門迎珠履三千客、戸列金釵十二行」とある(『古本戯曲叢刊五集』所收)。黄崇浩は「古詩にはすでに金釵十二行の言い方があるが、海棠の花をそれに結びつけたのは沈立のこの詩である」と指摘する。[6] 西府海棠のほか、白海棠と大觀園の娘たちとの關係にも注目していく。

寶玉喜道:「……你們就如秋天藝兒進我的那纔開的白海棠。」(第五十一回)

賈寶玉は侍女たちに「お前たちはこの秋に賈藝がぼくに持ってきてくれた、あの咲いたばかりの白海棠みたいなものだ」と述べる。陶先淮・陶劍は、それが賈寶玉の口を借りて大觀園の女性たちを海棠に喩えていると指摘している。[7]

探春道:「……可巧纔是海棠詩開端,就叫個海棠社吧。」(第三十七回)

第三十七回における海棠詩社は「白海棠」詩によって名を得たが、賈探春は詩社に名づけるとき、「海棠の詩がきっかけになったから、海棠社にしよう」と述べ、白海棠を海棠と稱する。しかも該回の回目の上句の「秋爽齋偶結海棠社」にも「海棠社」と稱され、「白海棠社」と稱されていない。怡紅院の西府海棠は第十七至十八回で初めて登場するとき「西府海棠」と稱される以外は、ただ「海棠」と稱されるのみである。[8]

以上から伺えるように、『紅樓夢』においては西府海棠や白海棠など各種の海棠に對して獨自の描寫もあれば、それらを大まかなくくりでただ「海棠」と稱する描寫もある。沈立の海棠百韻詩における「金釵人十二」から、遅くとも宋代には海棠で多くの女性を表わす用例があることがわかる。『紅樓夢』において、「女兒國」から來た西府海棠が見られることや、賈寶玉が大觀園の女性たちを秋に咲いたばかりの「白海棠」のようだと例えることから、作者が「海棠」を借りて大觀園の女兒世界を表現しようとすることが伺える。その中で特に注目したいのは史湘雲と海棠との特殊な關係である。

那一邊乃是一顆西府海棠,其勢若傘,絲垂翠縷,葩吐丹砂。(第十七至十八回)

西府海棠は「絲垂翠縷」と描寫されているが、史湘雲の侍女の名は「翠縷」という。周汝昌は、この「翠縷」という名が「絲垂翠縷」に呼應するものであると指摘している。[9]「翠縷」という言葉は八十回まですべて四十回くらい出現しているが、第十七至十八回の「絲垂翠縷」以外、すべて史湘雲の侍女の「翠縷」を指す語である。また、西府海棠の描寫も蘇軾の「海棠」詩と密接に關連している。

賈政因道：「想幾個什麼新鮮字來題？」……一個道：「『崇光泛彩』方妙。」賈政與衆人都道：「好個『崇光泛彩』！」（第十七至十八回）

賈寶玉「怡紅快綠」綠蠟春猶卷，紅妝夜未眠。（同前）

蘇軾「海棠」東風裊裊泛崇光，香霧空濛月轉廊。只恐夜深花睡去，故燒高燭照紅妝。

食客が怡紅院に提案した扁額「崇光泛彩」は蘇軾の「海棠」詩の「東風裊裊泛崇光」から來ており、賈寶玉の「怡紅快綠」詩における西府海棠を描く詩句「紅妝夜未眠」も蘇軾の「海棠」詩の「故燒高燭照紅妝」を踏まえたものである。つまり、前述した「只恐夜深花睡去」を含め、史湘雲の海棠籤と怡紅院の西府海棠の描寫をめぐって、蘇軾の「海棠」詩は三回引用されている。史湘雲の侍女の「翠縷」の名前の本意は綠の枝で、「絲垂翠縷」中の「翠縷」の意味と完全に一致している。もしも史湘雲を「只恐夜深花睡去」における海棠の花に喩えるなら、「翠縷」はまさしく海棠の花を支える綠の枝であり、意味上においても史湘雲と翠縷との主從關係に照應している。つまり、周汝昌の指摘のように、作者が侍女の「翠縷」と「絲垂翠縷」を相呼應させることによって史湘雲と海棠との關係性を強める蓋然性は極めて高いといえるだろう。西府海棠のほか、史湘雲は白海棠との關係にも注目する必要がある。第三十七回において、賈家の召使いである賈藝が賈寶玉に白海棠を二鉢送ってくる。それをきっかけに、「白海棠を詠ず」六首が作られた。白海棠の詩を作ったのは、賈探春、薛寶釵、賈寶玉、林黛玉と史湘雲の五人であるが、その中で史湘雲一人だけ二首を作っている。

（史湘雲）先笑說道：「我卻依韻和了兩首，好歹我卻不知，不過應命而已。」說着遞與衆人。……衆人看一句，驚訝一句，看到了，讚到了，都說：「這個不枉做了海棠詩！眞該要起海棠社了。」（第三十七回）

その場にいた皆は史湘雲の詩こそ海棠の詩を作ったと誇れるもの、本當に海棠社を起こすべきだと言っている。また、史湘雲の詩句「秋蔭捧出何方雪」に對して、己卯本において脂硯齋は「壓倒群芳、在此一句」、「二首眞可壓卷」と批評している。

以上、海棠詩社で史湘雲が一人で二首を作ることや、その場にいた人々が彼女の詩を讚えることなどのプロットから、作者が、史湘雲がその時の詩社活動で最も活躍している一人であることを強調する意圖は作中から直接讀み取れる。それに對して、史湘雲と西府海棠に關しては、八十回までに兩者

が直接關連する描寫が見つけられない。しかし、蘇軾の「海棠」詩を三回踏まえていることや、先行研究に指摘される「絲垂翠縷」と史湘雲の侍女である「翠縷」との關係から、作者が史湘雲と西府海棠とを關係づけようとする意圖が讀み取れるだろう。このように、史湘雲が西府海棠にも白海棠にも密接に關連し、さらに第六十三回に彼女が海棠の花籤を引いている。そこから、海棠を以て表現された大觀園の女兒世界において、作者が史湘雲を、海棠を代表する存在にしている意圖が見て取れるのではないかと考えられる。

二、海棠の「睡り」と史湘雲の「酔眠」

前述の通り、作者は意識的に史湘雲と海棠とを結び付けていると見られる。海棠は史湘雲の人間描寫においてどのように機能しているだろうか。史湘雲の海棠花籤の題字は「香夢沉酣」とあり、それと花籤の裏に書かれた「只恐夜深花睡去」とを結び付けて見ると、その花籤は海棠の品種も明確に指摘されなければ、海棠の花の美しさを描いたものでもないことがわかる。その描寫は海棠の「睡り」に關係するようである。海棠の「睡り」は、一般的に楊貴妃の「海棠睡未足」の記事を踏まえたものと考えられており、例えば、宋代の洪惠（一〇七一―一一二八）の『冷齋夜話』に次の記事が見られる。

東坡作「海棠」詩曰：「只恐夜深花睡去，更燒銀燭照紅粧。」事見『太眞外傳』，曰：「上皇登沉香亭，詔太眞妃子，妃子時卯醉未醒，命力士從侍兒扶掖而至。妃子醉顏殘粧，鬢亂釵横，不能再拜。上皇笑曰：豈是妃子醉，眞海棠睡未足耳。」[10]（『冷齋夜話』）

『冷齋夜話』に引く『太眞外傳』において、楊貴妃が酒に酔ってまだ醒めきらず、その艶めかしい様は唐玄宗に「海棠睡未足」と喩えられている。[11]しかも『冷齋夜話』では、蘇軾の「海棠」詩もその話を踏まえて書かれたものと考えられており、引用された「只恐夜深花睡去」は史湘雲の海棠の籤の裏にある詩句と同じである。

唐玄宗が楊貴妃の酔態を「海棠睡未足」に喩えるのは人間の描寫を中心とし、人間を花に喩えるという比喩の手法である。それに對して、蘇軾の詩の「只恐夜深花睡去」は花の描寫を中心とし、花を人間に喩えるという擬人化した手法である。また、蘇軾にはもう一首の海棠の詩作「寓居定惠院之東、雜花滿山、有海棠一株、土人不知貴也」があり、その中でも「日暖風輕春睡足」という詩句では直接「春睡」という言葉を以て海棠を描寫する。後に「海棠春睡」はしばしば海棠を描

く詩詞や詞句に見られるようになる。[12]

また、海棠の花籤は海棠の花の「睡り」についての描寫であるが、この描寫を解明するには、それに密接に關連する第六十二回における史湘雲の「醉眠」の描寫にも言及しなければならない。では、この二つの描寫は作中でどのように關連しているのだろうか。

黛玉笑道：『夜深』二個字改『石涼』兩個字。」衆人便知他趣白日閒湘雲醉臥的事，都笑了。……因看注云：既云『香夢沉酣』，掣此籤者不便飲酒，只令上下兩家各飲一杯。（第六十三回）

上掲の作品の原文はパーティーの出席者たちが史湘雲の海棠の花籤を見たその反應である。林黛玉は笑って「夜深の二字を石涼の二字に改めよう」と述べ、その場にいた人々は彼女が晝閒、史湘雲が醉って眠ったことをからかっているのだと知っているので、みな笑った。これは第六十二回「憨湘雲醉眠芍藥裀（回目の上句）」において史湘雲が醉って石のベンチに眠ったことを踏まえている。

湘雲臥於山石僻處一個石磴子上，業經香夢沉酣。四面芍藥花飛了一身，滿頭臉衣襟上皆是紅香散亂，手中的扇子在地下，也半被落花埋了，一群蜂蝶鬧嚷嚷的圍着他。又用鮫帕包了一包芍藥花瓣枕着。衆人看了，又是愛，又是笑，忙上來推喚攙扶。（第六十二回）

この場面では「香夢沉酣」となった史湘雲が氣持ちよさそうにぐっすり眠っている様が描かれている。「香夢沉酣」という表現は八十回までの閒に全部で三回現れている。この場面のほかは、第六十三回における史湘雲の花籤の題字「香夢沉酣」と花籤の注「既云香夢沉酣」の二箇所である。しかも、史湘雲の籤注には「既に香夢沉酣とあるからは、この籤を引き當てしものは、酒を飲むべからず、上下の二人に共に一杯を飲ませるべし」とある。このことから、籤注でも引き當てたものが「香夢沉酣」という狀態であることを想定した上で注をつけてあることがわかる。以上、作中で林黛玉や人々の口を借りて史湘雲の「醉眠」に言及していることや、その二つの場面で「香夢沉酣」が三回現れていることから見れば、作者が意識的に二つの場面をつなげていることが見て取れる。また、戚序本の脂硯齋評では史湘雲を楊貴妃と見なしている。

看湘雲醉臥青石，滿身花影，宛若百十名姝抱雲笙月鼓而簇擁太眞者。（戚序本第六十二回の回後評）

「簇擁太眞」から、脂硯齋は楊貴妃の「海棠睡未足」のことを念頭に置きながら、史湘雲の「醉眠」の場面を批評したこ

とがわかる。

一方、「香夢沉酣」については先行研究ではその出所が指摘されていないが、清代の董元愷（？―一六八七）の「賀新郎・雨後牡丹」詞には「香夢沈酣應未足」とある。

「賀新郎・雨後牡丹」　董元愷

雨過苔痕綠。見臺邊，遊人初踏，新芽還簇。倚徙闌干潮欲暈，猶是未消紅玉。映瑩肌，霧綃烟縠，倦彈雲鍋羞不語。灩盈盈，似向溫泉浴。淋漓處，餘芳馥。　香夢沈酣應未足，不須愁，慵欹無力。粉零香蹙，界破殘妝看更好，淚也耐人清目。況未值，封姨頻促，只恐姚黃與魏紫，笑窮愁，措大書生俗，嬌姿貯，須金屋。（『蒼梧詞』[13]）

「香夢沈酣應未足」や「映瑩肌」「似向溫泉浴」などの描寫から、董元愷の詞は「海棠睡未足」およびそのほかの楊貴妃物語の影響を受けていることが伺える。ただし、詞中で描寫されたのは「雨後牡丹」である。實際に「睡り」で花を形容するのは、例えば唐代の李賀（七九〇―八一六）「美人梳頭歌」詩の「驚起芙蓉睡新足」（『全唐詩』卷三九三）にすでに見られる。しかし、明確に「春睡」という言葉で花を描くのは、筆者の管見では唐代の溫庭筠（八一二？―八七〇）の「雨後牡丹」を描く詩句に最初に見えるものである。

「春夢宴罷寄宋壽先輩」　溫庭筠

斜掩朱門花外鐘、曉鶯時節好相逢。窓閒桃蘂宿粧在、雨後牡丹春睡濃。蘇小風姿迷下蔡、馬卿才調似臨邛。誰憐芳草生三徑、參佐橋西陸士龍。（『溫庭筠詩集』卷四）[14]

溫庭筠の詩は全體としては「雨後牡丹」を描いたものではないが、「雨後牡丹春睡濃」一句の中では「春睡」という語で「雨後牡丹」の様子を描いているのである。

そのほか、史湘雲の「醉眠」の場面の中には、「手中的扇子在地下，也半被落花埋了」という描寫が見られる。薛洪はこの「半被落花埋」は唐代大曆十才子の盧綸（七三七？―七九九？）の女性の「醉眠」を描く「春詞」詩の「醉眠芳樹下、半被落花埋」（『全唐詩』卷二八〇）より出ると指摘している。[15]「醉眠芳樹下」における「醉眠」と『紅樓夢』第六十二回「憨湘雲醉眠芍藥裀」における「醉眠」とは一致し、「半被落花埋」は直接作品の原文に取り込まれている。

「香夢沉酣」の考察から、蘇軾の海棠詩以前に、花の「春睡」という描寫がすでに見られる。同様に、盧綸の詩中の「醉眠芳樹下」で示されるように、遅くとも唐代には美人の「醉眠」の描寫が見られる。しかも、この二つのモチーフは元々相互に獨立して直接關連していないものである。『紅樓夢』におけ

る海棠の花籤や史湘雲の「醉眠」の描寫はまさしく古代の花の「春睡」と美人の「醉眠」を踏まえた上で書かれた二つの獨立した場面であるが、同時に作者が「睡り」という共通のモチーフに美女と花の比喩を絡めることにより、この二つの場面を密接に關連させている。

三、史湘雲をめぐる「海棠」と「芍藥」

史湘雲の醉眠と海棠の花籤との關係を考察するとき、「芍藥」にも注目する必要がある。第六十二回「憨湘雲醉眠芍藥裀」に現われるのは「芍藥」である。

芍藥はボタン科の多年草本植物で、古くから庭園用の花として愛されている。芍藥の文學的なイメージは古くは『詩經』に遡ることができる。『詩經・鄭風・溱洧』には「贈之以芍藥」とある。明代李時珍の『本草綱目』卷十四には「時珍曰く、芍藥は婥約という意味だ。婥約とは美好の形容で、この草は花の姿態が婥約たるものだからそれを以て名としてのだ」とある。清代の張新之は史湘雲の「醉眠」の場面に「贈之以芍藥」と評している、[16]では、芍藥は古代の戯曲・小說の中でどのように描かれ、どのようなイメージを形成しているだろうか。以下海棠と關わる描寫例に注目してみたい。

［一枝花］……亂紛紛蜂遊芍藥圃，鬧穰穰蝶戲海棠軒。閑戲鞦韆，女伴每相留戀。佳人每咲語喧，環珮響綠舞紅飛。蘭麝靄香嬌玉軟。（『雍熙樂府』卷九）

［醋葫蘆］海棠亭倦待遊，芍藥圃休去走。鬢鬅鬆亂挽綠雲稠。界殘粧一絲痕尚有，秋波偷溜，似楊妃睡醒懶擡頭。（『雍熙樂府』卷十四）

體似燕藏柳，聲如鶯囀林。半放海棠籠曉日，才開芍藥弄春晴。（『西遊記』第二十七回）

一日，妲己在鹿臺陪宴，陡生一計，將面上妖容徹去，比平常嬌媚不過十分中一二。大抵往日如牡丹初綻，芍藥迎風，梨花帶雨，海棠醉日，豔冶非常。（『封神演義』第二十六回）

芍藥と海棠は同じく春に咲く花で、［一枝花］における芍藥圃・海棠軒や［醋胡蘆］における海棠亭・芍藥圃のように、兩者はしばしば一緒に描かれている。「蘭麝靄香嬌玉軟」「鬢鬅鬆亂挽綠雲稠」「似楊妃睡醒」には美女たちの「嬌艶」が描かれている。また、『西遊記』では「半放海棠」「才開芍藥」で白骨精が變化した女子を描寫しているし、『封神演義』においては「芍藥迎風」「海棠醉日、豔冶非常」と妲己を形容している。以上の描寫から、『紅樓夢』以前にも、すでに「海棠」

と「芍藥」を對にして描寫する用例が見られる。續いて古代戯曲・小説において「海棠睡未足」の典故を踏まえて女性を描寫した例を取り上げる。

聲如鶯囀喬林，體似燕穿新柳。正是春睡海棠晞曉露，一枝芍藥醉春風。（容與堂本『水滸傳』第三十八回）

半擁凌波被，微金縷衣，鱔金翹亂堆著雲髻。托香腮醉眠在錦帳裏，嬌滴滴海棠春睡。（李愛山「壽陽曲・風情」小令）

［前腔（一剪梅）］（旦）裙襯弓鞋入繡房，蘭茝生香，環珮鏗鏘。（小旦）朝雲暮雨爲誰忙，心戀襄王，夢繞高唐。……起來無力憑欄杆，睡熟海棠花未醒。（旦）自慚陋質，而獲寵名公。身雖墮於風塵，而心每懸於霄漢。未知何日得遂從良之願。（『繡襦記』第四齣）

［虞美人］（占上）一身曾沐君恩寵，暖帳親承奉。香雲如鬢擁，曉妝尤倦，佩環聲細，絳裙風動。玉容未必傾人國，椒房寵愛君恩極。海棠睡起春正嬌，莫把金珠污顏色。……妾乃西楚霸王之妃。（『千金記』第三十七齣）

［賀新郎］你看魚鑰閉，龍帷掩，那楊妃呵，似海棠睡足增嬌艷。（『長生殿』第十一齣）

『水滸傳』において藝能で生活を立てる市井の女子の宋玉蓮は「春睡海棠晞曉露、一枝芍藥醉春風」と形容されている。

また、「壽陽曲・風情」小令における「托香腮」「嬌滴滴海棠春睡」や『長生殿』における「海棠睡足增嬌艷」は曲中の女子や楊貴妃の艷かしい様を形容している。さらに、『繡襦記』における「朝雲暮雨爲誰忙、心戀襄王、夢繞高唐」、『千金記』における「暖帳親承奉」から、「海棠春睡」は女主人公李亞仙や虞姫の居室の色情的な雰圍氣を演出するために使われていることが見て取れる。

以上の考察から伺えるように、積極的に男性を魅惑する妖怪の白骨精や妲己、やむを得ず娼妓になった李亞仙、帝王に寵愛される虞姫や楊貴妃、市井の女子の宋玉蓮と、ヒロインたちの人物形象はさまざまだが、彼女たちが「嬌艷」という一面を持つことが共通している。しかも、「海棠春睡」を踏まえて女性の美しさを描くとき、作中での役柄が善玉か惡役か問わず、男性を魅惑したり強く引き付けたりする「嬌艷」という一面を持つことが強調されている。では、『紅樓夢』史湘雲の描寫において、「海棠春睡」を踏まえるとき、それまで形成されていた、美しい女性ならみな「嬌艷」の一面を持つというイメージはどのように扱われたのだろうか。

周知のごとく、『紅樓夢』において作者は大多數の女性に對して肯定的な態度をとっている。例えば、「女兒栄」の西府海

棠や「氷雪」のようにけがれのない白海棠を以て大觀園の娘たちの純潔で美しいイメージを描くことはその一例である。しかし、娘たちが純潔で美しいからこそ、強く男性を魅了することは言うまでもない事實である。例えば、作中では次のような描寫も見られる。

別人慌張自不必講，獨有薛蟠更比別人忙到十分去。……忽一眼瞥見了林黛玉，風流婉轉，已酥倒在那裏。（第二十五回）

薛寶釵の兄である薛蟠は「獃霸王」「濫情人」（第四十七回、四十八回の回目に見える）と示されるように、『紅樓夢』における代表的などら息子の一人である。あるとき薛蟠は林黛玉の「風流婉轉」を見てその場ですっかりデレデレしてしまう。林黛玉の美しさは作中で重點的に描かれるが、彼女が自分の美貌を以て故意に男性を魅惑するような描寫は作中では見つからない。しかし、林黛玉自身が意識的に男性を誘惑するか否かに關わらず、彼女の美貌そのものは男性を強く引き付ける。また、美貌という點で言えば、林黛玉に匹敵する史湘雲はもちろん、さらに海棠を以て表現されている大觀園の大多數の娘たちもみな同じであり、史湘雲はその娘たちの中の代表として存在するのである。

おわりに

以上、海棠の花籤や史湘雲の「醉眠」の描寫を中心に、『紅樓夢』における史湘雲と海棠の關係について考察を加えた。考察を通して、『紅樓夢』において海棠を以て作中の娘たちを表わすと同時に、史湘雲は海棠を代表する存在として位置づけられるのではないかと考えられる。また、海棠の花籤と史湘雲の醉眠の描寫において、一つが蘇軾の「海棠」詩を踏まえて花の「睡り」の描寫を中心とし、もう一つが楊貴妃の「海棠睡未足」を踏まえて美女の「睡り」の描寫を中心とした、二つの獨立した場面に分かれて描かれる一方、作者が「睡り」という共通のモチーフを通して二つの場面を關連させている。

蘇軾の「海棠」詩は海棠の花を描く名作であり、しばしば後世の海棠を描く詩作に引用される。『紅樓夢』において、「只恐夜深花睡去」および「崇光泛彩」や「紅妝夜未眠」は蘇軾の「海棠」詩を踏襲するのであるが、先行研究で指摘される「絲垂翠縷」や史湘雲の侍女「翠縷」との關係を結びつけて見ると、海棠の花籤と西府海棠の描寫において、蘇軾の「海棠」詩が三回引用されたり踏まえられたりするのは、史湘雲と海棠・西府海棠との關係を強めるという作者の意圖もあっ

たと考えることができるだろう。

一方、「海棠睡未足」の典故は元々女性の酒の醒めきらない「醉態」の描寫であり、つまり「しどけない」姿態の描寫である。後に女性の「妖艶」の描寫に結び付けられ、さらに色情的な雰圍氣を演出するためにも用いられるようになる。しかし、史湘雲の「醉眠」の描寫においては、娘たちが史湘雲の様子を見て「又是愛、又是笑（第六十二回）」ということから、作者が基本的に彼女をかわいい美少女として描いていることがわかる。特に林黛玉や薛寶釵がしどけなく醉って眠るという人物形象では絶對にありえないからこそ、史湘雲の闊達で朗らかな性格は一層に際立っている。しかし、作中で正面から彼女のかわいい美少女のイメージを表わす一方、楊貴妃の「海棠睡未足」を踏まえるのは、彼女の美しさが非常に男性を魅了する「妖艶」という一面もあることを暗示するためだろう。

注

（1）森中美樹『紅楼夢』中の海棠――夢の世界に現実を見つめて咲いた花――」、『岡村貞雄博士古稀記念中国学論集』、四七七―九六頁、白帝社、一九九九年。

（2）本稿で引用した『紅楼夢』の原文は、主に庚辰本を底本とし、適宜以下の排印版のテキストを參照した。〔清〕曹雪芹（著）、馮其庸（重校評批）：『瓜飯樓重校評批紅樓夢』、遼寧人民出版社、二〇〇五年。

（3）陳詔『紅樓夢』小考（十）」、『紅樓夢研究集刊』第十一輯、三五四頁、一九八三年。一方、第五回や第十一回に秦可卿の寢室に掛けられる「海棠春睡圖」も、楊貴妃の「海棠睡未足」を踏まえて描かれた圖繪の作品だと考えられるが、それについては、森中美樹『紅樓夢』における情の世界と花――第五回「海棠春睡圖」を手がかりに――」（中國中世文學會編、『中國中世文學研究――四十周年記念論文集――』、三三三―四四頁、白帝社、二〇〇一年）に詳しい考察がある。

（4）周汝昌『周汝昌夢解紅樓』、一〇四頁、漓江出版社、二〇〇五年。

（5）［宋］陳思：『海棠譜』、『叢書集成初編』、商務印書館、一九三九年。

（6）黄崇浩「海棠魂夢繞紅樓――對『石頭記』中海棠象徵系統的考察」、『黄岡師範學院學報』、二〇〇一年二月。

（7）陶先淮・陶劍「臨歧幾點相思淚　滴向階前發海棠――試論『紅樓夢』的眼目和白海棠詩――」、『中國文學研究』、一九九五年第二期。

（8）例えば、第二十五回の「前面有一株海棠花遮着」、第五十九回の「見麝月正在海棠下晾手巾」、第七十七回の「這階下好好的一株海棠花」などが擧げられる。

（9）前掲の周汝昌『周汝昌夢解紅樓』參照、一〇四頁。

（10）［宋］釋惠洪『冷齋夜話』、『叢書集成初編』、商務印書館、一九三九年。

（11）楊貴妃の「海棠睡未足」の出所は宋・洪惠（一〇七一―一一二八）の『冷齋夜話』に引く『太眞外傳』（宋・樂史『楊太眞外傳』）と『明皇雜錄』（唐・鄭處誨撰）の二説があるが、現存する『楊太眞外傳』と『明皇雜錄』のテキストにはいずれもこの逸話が見つからない。『紅樓夢』研究において、例えば、蔡義江は「海棠春睡圖」に描かれたのが楊貴妃の醉態の物語であることを指摘したが、その出所については明確に指摘していない（蔡義江『紅樓夢詩詞曲賦評注』、三〇頁、北京出版社、一九七九年）。また中國藝術研究院紅樓夢研究所校注『紅樓夢』（人民文學出版社、七一頁、一九八二年）における第五回「海棠春睡圖」の注釋に引く『明皇雜錄』に「上嘗登沈香亭、召妃子。妃子時卯酒未醒、高力士從侍兒扶掖而至。上皇笑曰：豈是妃子醉耶。海棠睡未足耳」とあるが、どのような『明皇雜錄』のテキストから引用したかは言及されていない。『紅樓夢』校注本（北京師範大學出版社、一〇三頁、一九八七年）における第五回「海棠春睡圖」の注釋にも同じく『明皇雜錄』より出るとし、『明皇雜錄』については蘇軾の「寓居定惠院之東、雜花滿山、有海棠一株、土人不知貴也」詩の「日暖風輕春睡足」に對して、宋・施元之注に引く『明皇雜錄』という記載を根據としている。しかし例えば、同じく「日暖風輕春睡足」に對して、『集註分類東坡詩』（『四部叢刊』所收）においては、宋代の趙次公の注に引く『楊妃傳』とする。しかも宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』（卷三八「東坡一」）や宋・祝穆『事文類聚』（卷三一「睡未足」）など宋代の詩話・類書において「海棠睡未足」は『冷齋夜話』の記載を引くか、直接『太眞外傳』より出るとする。本稿では、主に古代で「海棠春睡」が一般的に楊貴妃の「海棠睡未足」より出ると考えられる事實に着眼にし、「海棠睡未足」をどのテキストによるべきかについてはこれ以上立ち入らない。ただし、『冷齋夜話』の作者の洪惠の、蘇軾の「海棠」詩の「只恐夜深花睡去、更燒銀燭照紅粧」が『太眞外傳』における「海棠睡未足」の逸話を踏まえて描かれたという指摘は、後世に極めて大きな影響を與え、本稿での論述にも密接に關連するので、本稿では『冷齋夜話』の記載に基づいて「海棠睡未足」を考察する。

（12）例えば、宋代范成大の「海棠欲開雨作」詩の「春睡花枝醉夢回」、元代薩都剌の「次王本中燈夕觀梅」詩の「不似海棠春睡去」などが擧げられる。

（13）清・董元愷『蒼梧詞』、陳乃乾編輯『清名家詞』（太平書局、一九六三年）所收。

（14）『四部叢刊』所收。

（15）薛洪「驚破紅樓夢里心」、『社會科學戰線』、一九九五年第六期。

（16）馮其庸（纂校訂定）『八家批評紅樓夢』、一五二一頁、文化藝術出版社、一九九一年。